

ジャック・ロンドンの悲劇-超人と社会主義との相剋-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学文学部研究所文芸研究会 公開日: 2011-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 須山, 静夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/9723

ジャック・ロンドンの悲劇

—超人と社会主義との相剋—

須山 静夫

Alfred Kazin は、その著 *On Native Grounds* のなかで、ジャック・ロンドン (1876-1916) について、次のようにいっている。

「彼はあらゆる主義につかみかかり、一日に十九時間読書と仕事とをし、いろいろな方角をたどった。しかし、彼が真底からしがつた道は一つもなかった。」

この言葉は、一言にしてジャック・ロンドンがおちこんだ矛盾をいつくし、またその矛盾からおこった彼の悲劇を洞察している。「あらゆる主義」(every doctrine) とケイジンはいっているが、ジャック・ロンドンの作品を通じてその主流となっている主義は三つある。第一はハーバート・スペンサーの進化の法則であり、第二はロンドンがいうところのニーチェの超人であり、第三はマルクスの社会主義である。これら三つの思想が、ときに

は紙背にあって彼の作品のバックボーンとなり、ときには歴然として原型を保ったまま、消化されずに、作品のなかにあらわれているのである。三つの思想といたが、このうちスペンサーの進化の法則は、ロンドンがいうニーチェの超人へいたる段階であって、結局そのなかに融合されるものである。そして、この超人主義と、彼がほとんど本能的にもっていた社会主義とは、ついに相容れることなく、常に相剋しながら、ジャック・ロンドンの死にいたるまで（あるいは、死のごく間近かにいたるまで）、存続していったのである。

これらの思想は、貧困になやまされていた家庭で成長したジャック・ロンドンが、ほとんど独学で図書館を利用して学びとったものである。それでは、これらのものは特にジャック・ロンドンだけが興味をもった問題であ

ろうか。もちろん、彼自身の個人的な性格と環境とが、彼をしてこのような問題に興味をもたせるための最適な温床となったことは否定できない。しかし、彼はその時代——十九世紀末から二十世紀初頭まで——の、例外的な産物では決してなく、むしろ最も典型的な産物といってよいと思われる。というのは、その時代の大きな流れのなかに、これらの思潮があったのである。まず、スペンサーの進化の法則について見てみよう。

ヘーバート・スペンサー（一八二〇—一九〇三）の *First Principles* が発表されたのは一八六二年である。

プリンストン教授の *Main Currents in American Thought* によれば、「南北戦争後に生れた世代にとって、スペンサーの魅力は非常なものであった、熱烈な若い人々にとっては、神学の灯火は燃えつきており、自分達の足もとを照らす新しい光をもとめて、否応なしに彼のほうへひかれていった。先輩の指導をふりすててしまつて、死んだ信仰の交錯しているなかに、新鮮な道を発見しようとする命になつていた若い叛逆者たち——人生と文学と信仰とにおけるお上品な伝統に対抗する写実主義謀叛の指導者となるべきハムリン・ガーランドや、ジャック・ロンドンや、シオドア・ドライザーのような自主的な人々——は、アメリカ精神を古い神学的抑制から解放するため

に、彼から学んだのである。」このように、新しい世代は、進化論の適者生存という法則を、古い神に代るもの、古い道徳にかわるものとして奉ずるようになったのである。適者生存という法則を認めることは、言葉をかえていえば、強いものが生きのこり、弱いものが滅びる世界を肯定することである。これは必然的に強いものを讃美することになる。

また、スペンサーの思想からはなれて考えてみても、十九世紀末から二十世紀のはじめにかけてのアメリカ全体の風潮は、まさに、強いものへの賞讃に満ちていた。独立後百年を経たアメリカは今や世界列強の一に加わっていた。国内ではカーネギーが一労働者から出発して、鋼鉄工業を盛んにし、みずからは莫大な産をなした。彼が「ウォール・ストリートの支配者」J・P・モルガンに全事業を譲渡したのは一九〇一年のことである。ロックフェラーがスタンダード石油会社をおこしたのもこの時期である。一八九〇年には、シャーマンの反トラスト法が施行されたが、ルーズヴェルト大統領の時代には、もはやトラストの発達をおさえることはできなかった、また、国際面においては、アメリカは一八九八年にハワイを併合し、米西戦争に勝利をおさめ、帝国主義的躍進をとげた。モルガンも、カーネギーも、ロックフェラーも

この「タイタニックなアメリカにふさわしいタイタニックなアメリカ人」であった。このような国状で、強者は弱者に対して無情であるというダトウィン主義が肯定されるのは当然である。単に消極的な態度でダトウィン主義が肯定されただけではない。人間を制御すべき道徳はこれ以外になかったのである。したがって、人間は死ぬまでは自己のエネルギーを最大限に發揮して生きるべきであるということが、唯一の倫理となるのである。

このような考え方が、ゾラの思想と相まって、アメリカのリアリズムは頂点に達したといえよう。ゾラの思想は、周知のごとく、遺伝と環境とが人間の生き方を決定するというものであり、獸的な生命力を尊敬するものである。

フランク・ノリスも偉大と力とに対して憧憬を示し、この時代の特徴的な作家であったが、ジャック・ロンドンには、力に対する尊敬と、強者が生存し弱者が滅びるのを是とする倫理とを極限にまですすめてゆき、彼のいうところの超人主義に到達した。彼の原稿料がそれまでの作家の誰れよりも高かったということも、彼がその時代の流れに乗っていたこと、その時代の典型であったことが、一つの原因であったのではないか。そして、このように、いわば時代の寵児であったともいべきジャック

・ロンドンが四十歳で自殺をとげなければならなくなったことの源には、彼の超人と、それに反対する社会主義とが、同時に一つの精神のなかに存続しようとしたことから起った混乱がある。これから、彼の生活と作品とについてこの点を考えて見たいと思う。

まず、ジャック・ロンドンが彼の超人主義に到った経路をたどって見よう。

彼は一八七六年サンフランシスコに生れ、九歳のとき一家とともにオクラホダに移り、ここで小学校を卒業した。不景氣と、それにもなう赤貧とのために、後年「人生が私に意味するもの」What Life Means to Me, 1906 にも書いているように、小学校在学中にすでに新聞売りや、近所の使い走りなどした。卒業すると、確詰工場ですぐ賃金をかせぎながら働かなければならなかった。いわば社会のどん底に育った彼が、この階級からはなれて、上の階級にのぼろうと——すなわち、弱いものの階級を脱して強いものにあつまりにはいろうと——強く欲していたことは、「人生が私に意味するもの」から容易にうかがい知ることができる。一五歳のときに、彼が知人から三百ドル借りてヨットを買い、その所有者

となり、牡蠣泥棒の首領となって夜ごとにサンフランシスコ灣内を荒しまわり、「牡蠣泥棒の王子」というあだ名で呼ばれたのは、そのような彼の欲望の明白ならわれである。

強いものへの憧れを助長するものとして旺盛な体力も彼はもっていた。一八九三年には、少年の身でありながら、一人まへの水夫としてオットセイ漁船に乗りくみ、七ヶ月間にわたって太平洋を航海した。その航海から帰ると、経済的必要にかられて、発電所の石炭運びになった。「シモン・バーリコン」John Barleycorn, 1913に書いてるように、彼はここで二人の大人のかわりに備われ、一日十時間以上の重労働をやった。

しかし、その後彼は、筋肉という資本は使えば使うほど増大するのではなく、年とともにすり減ってゆくものであり、頭脳を資本にしたほうが賢明である、と考えた。「社会の大広間」に住むようになるために、「頭脳の商人」になることを決心したと、「人生が私に意味するもの」の中でいっている。こうして、一八九五年には一九歳でオークランドの高等学校に入ったが、その教育にあきたらず、まもなく退学した。それから、彼は一日五時間睡眠で、そのほかのすべての時間を利用して勉強した。この当時の模様は、彼の自叙伝的小説「マーティン

・イーデン」Martin Eden, 1909のなかにも物語られている通りである。ジャック・ロンドンは、「上流階級の人々が住んでいる。あの高尚な領域に上ろう」to rise to that sublimated realm where dwelt the upper classes、と欲したのである。そして、一八九六年にカリフォルニア大学に入學した。しかし、ここでも彼は満足をあたえられず、また一方には家計を支える必要もあって、翌年には中途退学した。それから五ヶ月後には、アラスカのクロナイクに金鉱が発見されたのを機に、ただちにその、ゴトルド・ラッシュの奔流に身を投じて、アラスカへおもむいた。零下数十度の酷寒や、種々の困苦欠乏にも屈しない、彼のオプティミスティックな気質と、強靱な体力とは、アラスカを背景にした「バーニング・デイルイト」Burning Daylight, 1910の第一部や、「スモーク・ベルー」Smoke Bellew, 1912 などから知ることが出来る。

バーニング・デイルイトは金を発見し、クロナイクの王と呼ばれるほどの富を得て、一八九八年にドーンソンを去り、サンフランシスコに来ることになっている。ところが、ジャック・ロンドンは約一年のアラスカ滞在のあげく、金は全く獲得できなかった。彼が得たものは金鉱ではなくて、後に彼が書く小説の材料であった。

一八九八年アラスカから帰った彼は、ふたたび家計を保つために郵便配達をしながら、いよいよ創作活動にはいった。「マーティン・イーデン」では、主人公は自分の書く小説が一向に売れず、恋人のルースに法律家になれと再三すすめられることになっている。彼はそれでも初志をすてず、ついに長い黙々たる努力がむくいられて、成功をおさめるのである。事実、ジャック・ロンドン自身も方々の雑誌に投稿して、いくどか無言のまま返送されつづけたが、彼はそれに屈せず筆をすすめ、苦心惨憺した結果、ようやく作品がみとめられるようになった。そして、ついに彼の名声をひろめるようになったのは、「野性の呼び声」The Call of the Wild, 1902である。

「野性の呼び声」は、それより数年後に発表された「白い牙」White Fang, 1906と一対をなすものである。前者においては、文明化されていた犬が、アラスカの原始的な自然と社会とのなかで生きていた犬が、次第に野性に還元されてゆく状態を描き、後者においては、逆に野犬が人間とともに生きてゆくあいだに文明化されてゆく有様を描いている。これらは一見して対照的のようであるが、両者共通に、環境が生物の形成と変化とを支配するということと、一個の生物のなかには、それが文

明社会にいようと、原始社会にいようと、自己保存の本能の力が大きな作用をしていることを示している。もちろん、この本能は、原始社会におけるほうが、あからさまな姿をあらわすものである。アラスカという未開社会では、「棍棒と牙と」が「法律」であり、強いものが弱いものをかみ殺しても非難されることはない。アメリカ本土では文明というものにカムフラージュされているものが露骨にあらわれているのである。この「生存への冷酷な闘争」のなかでは、愛とか友情とかいうものは問題にならず、他人の感情を尊重することは愚かなことさえある。そして、そういう環境にすみやかに順応しなければ、即座に悲惨な死をとげるよりほかない。

He must master or be mastered; while to show mercy was a weakness. Mercy did not exist in the primordial life. It was misunderstood for fear, and such misunderstanding made for death. Kill or be killed, eat or be eaten, was the law.

(彼は支配するか、さもなければ支配されなければならない。慈悲を示すことは懦弱であった。この原始的生活のなかには、慈悲は存在していなかった。それは恐怖とまちがえられた。そして、そのように誤解されたために殺されるということになるのであった。殺すか、殺さ

れるか。食うか、食われるか。それが法律だった。」

「野性の呼び声」の主人公である犬のバックが、カリフォルニアから移されてきた世界、「白い牙」の主人公である犬のホワイト・ファングが、生れながらにして生活した世界は、ともにアラスカである。そこでは、文明社会の道徳といわれるものが無役になってしまうのである。したがって、バックにとっても、ホワイト・ファングにとっても、唯一の生存意義は殺すということである。言いかえれば、自己保存の本能にしたがって生きることである。バックは、原始的環境に順応するにしたがって、自分自身の本性の奥深くにある野獣性に喜びを感じずるようになり、ホワイト・ファングはアラスカの原始世界で成長するにしたがって、殺すことに欲望をおぼえるようになる。彼は、他の野獣を殺すたびに、無意識に大きな喜びを感じる。彼等は、祖先から伝ってきた遺伝的な素質によって、この「適者生存」の世界のなかの適者、すなわち強者になったのである。

ジャック・ロンドンは、これら二匹の犬に托して、彼自身のなかに育まれてきた強者に対する賞讃を卒直に表現したのである。バックは、森の奥からきこえてくる野性の呼び声にひかれ、ついに人間との絆がぎれて、森にはいってしまふ。ホワイト・ファングは、それとは逆

に、人間に連れられて、カリフォルニアに来て、新しい環境にうつされる。しかし、彼等は両者とも、最後まで強者である性格を失わない。このこと——これら二匹の犬が、各作品の終りまで一貫して、強者であり続けたということ——これが、その後のロンドンの作品とことなる重要な点である。バックは森にはいってからも狼の群の首領となり、近辺のインデアンに悪霊として恐れられる強犬であり、ホワイト・ファングは、自分の主人に復讐を企てた兇悪な犯罪人に反撃を加え、それを殺し、犬の王として尊敬されるようになる。すなわち、この二つの作品は、まだロンドンのいうところの超人主義へ向う姿勢を示しているだけであるといつてよい。これから後で問題になることであるが、その超人と社会主義との軋轢になやみ、なんとかして超人を滅してしまわなければならぬというような窮地にまで進んでいかなかったと考えられる。「野性の呼び声」と「白い牙」とが彼の作品のうちで最もすぐれたものであるといわれる原因は、犬の行動や心理の描写が躍如としていることにもあるだろうが、ロンドンの強者に対する憧れの表出が終結にいたるまで無理なく行われたことにもあるのではないかと思う。あるいは、犬自体が倫理観念にとらわれる必要のない動物であるから、ジャック・ロンドンは社会主義の

束縛を感じなくてもよく、自由に強者への憧れをあらわすことができたのかも知れない。

実際、人間が強者として登場してくると、彼は自己の意志と思想とによって行動するものであり、また、一般に人間に受け入れられている道徳観念とたたかわなければならぬから、その場の情景は凄惨ともいえるものになってくる。そして、今まで単に強者であったものが、ロンドンにおける超人というはつきりした形をもつようになる。これが次にあらわれた段階である。

ジャック・ロンドンは「野性の呼び声」を発表してから二年たつて、「海の狼」The Sea Wolf, 1904 を発表した。この舞台は、彼が一八九三年にオットセイ漁船に乗組み、シベリヤ沿岸にまで航海した海である。主人公ウルフ・ラーセンの一見してわかる最も著しい特徴は、その異常な肉体的な力である。ジャック・ロンドンは強烈な生々しさで、この想像上の人間の筋肉力をもりあげてゆく。ウルフ・ラーセンにとっては、自分の命令にしたがわない数名の船員たちを、なぐりとばして服従させるぐらいのことは、なんの雑作もないことである。彼は、この物語の話者ということになっているハンフリー・ヴァン・ワイデンの眼の前で、じやがいを片手で握りつぶすというようなこともやってみせる。彼は「千年

も昔に任んでいたかと思われるような、原始的な筋肉力をもったゴリラのような男」である。

船長ウルフ・ラーセンのもう一つの特徴は、彼が彼自身の独特な倫理観をもっていることである。そして、それは彼のヴァン・ワイデンとの議論のなかにあらわれている。彼はヴァン・ワイデンに言う。

“The big eat the little that they may continue to move, the strong eat the weak that they may retain their strength. The lucky eat the most and move the longest, that is all.”

（大きな奴等は動きつづけるために小さな奴等を食うし、強い奴は力をたもつために弱い奴を食う。運のいい奴は一番たくさん食って、一番長いあいだ動くのだ。それだけのことだ。）

また、彼は、「最も強いものが生きのこるまで、生物は食ったり、食われたりするのだ」ともいう。したがって、彼にとっては、力が正で、弱いということはすなわち悪である。これは更に、

It is their inborn heritage to strive to devour, and to strive not to be devoured. When they depart from this they sin.

（食うために戦い、食われないために戦うのは、彼等

が生れながらにしている遺産だ。これから離れたときに彼等は罪をおかしたことになるのだ。) ということになる。

彼はまた、

Spencer puts it something like this: First, a man must act for his own benefit—to do this is to be moral and good. Next, he must act for the benefit of his children. And third, he must act for the benefit of his race.

(スペンサーは、それをこんなふうに言っている。第一に、人間は自分自身の利益のために行動しなければならぬ。こうすることが道徳的であり善であることなのだ。次に、自分の子供の利益のために行動しなければならぬ。それから第三に、自分の民族の利益のために行動しなければならぬ。)

と言ひ、彼自身は、第二と第三とを感傷にすぎないとして切りおとし、第一だけを目的としている。それが彼の行動を規制する唯一の道徳律である。このような倫理観にもとずいている彼には、他人の生命を尊重しようという意志は毛頭ない。二人の船員がボートに乗って大波にもまれてゐるのに、彼は救いあげようとせず、ついに二人が波にのまれるのを平然として見殺しにする。また

トマス・マグリッジというキャビン・ボーイにふとしたことから腹をたて、ラーセンは彼にロープをしぼりつけ、船尾から海中に流す。鑓がトマスにおそいかかり、彼の片脚を食いとってしまつても、ウルフ・ラーセンは全然同情を示さないのである。

このように、ウルフ・ラーセンによってロンドンがあらわしたものは、バックよりも更に一段と強いものである。このウルフ・ラーセンをジャック・ロンドンが almost a god in his perfection (完全さにおいてほとんど神) であるといっている。彼はここではまだ超人という言葉を使っていない。しかし、このウルフ・ラーセンは明かにジャック・ロンドンが、その後の作品でみずからニーチェ的超人と呼んだものと同様な性格をもっている。たとえば、「バーニング・デライト」の第二部は主人公がサンフランシスコに来て、アラスカで得た富を資本にして運輸業をはじめからの話であるが、彼の根底の思想は人生が賭博であるということであり、全精力をつかつて他の実業家を強奪する。彼は自己の安全だけをはかり、彼等の損害はかえりみない。デライトは次のようなことを言う。

Thou shalt not steal was only applicable to the honest worker. They, the supermen, were above

such commandments. They certainly stole and were honored by their fellows according to the magnitude of their stealings.

〔汝、盗むなかれ〕ということとは正直な労働者に適用されただけだ。彼等——超人——は、そのような戒しめに縛られなかったのだ。彼等はたしかに盗んだ。そして、その盗みの莫大なことによって仲間から尊敬されたのだ。〕

ウルフ・ラーセンの職業と場所とをかえれば、そのままバーニング・デイトになり得るともいえよう。

更に、「エルシノア号の叛乱」The Mutiny of the Elsinore, 1914では、一等航海士・バイクについて、ロンドンには「ニーチェが彼を見たらさぞ喜んだであろう」という意味のことを書いている。(ただし、この作品では、バイクという人間の創造に十分な力が注がられておらず、バイクが人並以上の体をもっており、機敏であることはわかるが、彼の超人としての倫理的根拠は明確に示されていない。)

これらのほかに、「鉄の踵」The Iron Heel, 1907のアーネスト・エヴァーヘッドも超人と呼ばれているが、これは社会主義者であるから、他の三人と多少性格がことなる。したがって、アーネスト・エヴァーヘッドについ

てはあとで考えることにして、これら三人について見ると、彼等の性格はほとんどおなじである。したがって、バーニング・デイトやバイクを超人と名づける限りにおいては、ウルフ・ラーセンも当然ロンドンがニーチェ的超人と呼んだものに属するといえるわけである。(Charles Walcutt は、その論文「The Naturalism of Vandover and the Brute」のなかで、「ジャック・ロンドンが「海の狼」や初期のユーコン河地方の暴力の物語を書いたときには、ニーチェはまだ英語に翻訳されていないかった」と書いている。しかし、「海の狼」と同じ頃に発表された「いかにして私は社会主義者になったか」How I Became a Socialist, 1903で、ロンドンはニーチェに言及している。したがって、ウォルカットの言が正しいとしても、ロンドンがこのときニーチェを知らなかったとは言えない。ただし、ロンドンがウルフ・ラーセンを「ほとんど神に近いもの」とさえ言ったが「超人」と呼ばなかったことは事実である。しかも、今述べたように、ウルフ・ラーセンは、ロンドンのいうところのニーチェ的超人としての性格は完全にそなえているのである。)むしろ、性格描写が不完全なバイクよりも、はるかに明白に超人的である。

それでは、ニーチェがこのような超人を見たとした

ら、果して彼は、ロンドンがいうように、喜んだであろうか。これは相当大きな疑問であると思う。ジャック・ロンドンが考えたいわゆる超人と、ニーチェの超人とは似ている点もあるが、大分こととなったものである。まず第一にその出発点から考えれば、今更いふまでもなく、ニーチェはキリスト教の説く善悪の觀念、他律的な道德に反抗し、ここから創造者としての超人を考え出したのである。彼は神を否定する。それは彼が「もし神々がすでに存在せりとせば、いまはた創造すべき何物があろうぞ」と考えたからである。そして、彼は「神は死んだ」と叫び、それに代るものとして超人が生きんことをねがった。すなわち、彼の超人は新しい道德であり、「創造し、意欲し、価値判断する自我」である。そして、彼は従来の道德を「罌粟の花の道德」と呼んだ。従来の道德觀念は自己価値をもたず、なんらかのより高い価値に從属せしめられていた。超人の道德はそれ自身が目的である。そして、ニーチェはこの超人に從來悪とされてきたものを善としてゆるした。支配欲と我欲と淫欲とである。淫欲については、ここでは關係がないから論ずる必要がない。支配欲とは、強者が弱者をもひきあげるべく弱者に働きかける義務であり、我欲は、至高なものをおさるに上へと成長すべく命令するものである。他人を犠牲

にしたり、自己に放縱を許すことではない。人間を愛し、積極的に事をする力をもつことである。

一方、ジャック・ロンドンにとつても、神は死んでいた。少くとも従来の善悪の道德は死んでいた。「エルシノア号の叛乱」のなかで、彼は、

Life is no longer good or evil. It is a perpetual play of forces without beginning or end.

(人生はもはや善でも悪でもない。それははじめもおわりもない、絶え間のない力の活動である。)

といっている。バーニング・デイトにとつては、神は運と呼ばれる気ままな氣ちがいじみたものであり、トランプ賭博が人生であり、賭博者のあつまりが社会である。強いものが弱いものをふみにじるのは、彼にとつても当然なことであった。ジャック・ロンドンは、このような社会における最強のものにニーチェの超人と類似した性質を發見し、これを超人と名づけたと考えられる。

したがって、ロンドンの超人には生命に対する尊敬は發見できない。ウルフ・ラーセンは、「生命はやすいものうちでも、最もやすいものだ」という。ロンドンの超人とは、一言でいえば、brutal consciousness of power (力に対する獸的な意識)であり、The lust for power (力への欲情)である。ニーチェは「新しい道德——そ

は力である」といっており、ジャック・ロンドンの超人は、これと表面的には一応似ているように見えるが、内面的に如何にその差が大きいことか。ニーチェにとっては「真の偉大さとは創造力であ」った。そのためには、ニーチェは自己をも犠牲にしなければならぬ。彼は「自己を全個人にすること」を尊重した。しかし、これは自ら法則を立てて、自ら立てた法則に服従することであり、放縦とは全く正反対なものでなければならぬ。

「善とは勇敢なることである」といい、「悪とは——怯懦である」といい、「人はまずその矮小と虚弱とを征服しなければならぬ」と、ニーチェはいう。彼のいう偉大とは物理的な力の偉大ではなく、内面的活力の偉大を意味するものである。「適者生存」の法則から出発したジャック・ロンドンが、ニーチェの偉大とは似て非なる強大到到達し、あえてそれを超人と呼んだ。倫理的空虚におちいったかのように見えたニーチェを借用して、最もおかしやすい誤謬にはまりこんだのである。

ニーチェはいう、「なんぢらの隣人の愛とは、なんぢら自身に対するなんぢらの悪しき愛である。隣人の愛より高いものは、もっとも遠くしてはまだ来らざるものへの愛である」と。また彼は「エゴイズムは悪ではない」ともいう。彼のこの非同情主義は利己主義ではない。彼

は、卑小なものに同化して人類の向上をさまたげることには反対したのである。彼の関心は自己にあったのではなく、人類全体にあったのである。しかし、彼のこの言葉を表面的に解釈すれば、ただちに利己主義へ迷いこむことになる。ロンドンの超人は、現在の自己をほしきままにするもの、すなわち、本能主義、誤解されたニーチェ主義にもとづいた超人であるといつて過言ではなからう。それは往々にして肉体的な強者である。精神的な強者である場合においても、それには創造の意欲はない。「適者生存」の世界での適者、弱肉強食の社会における強者であったに過ぎない。

しかし、このような誤謬の責を、彼にのみ押しつけるのは当を得たことではない。先に述べたように、アメリカ一般の社会の傾向が、「適者生存」へ向つていたのである。この意味において彼はその時代の代表的なものであったと思うのである。また、彼自身が強者へのあこがれをもつていたこと、そして非凡な体力をもつていたことも、見のがしてはならないことである。彼のつくりあげた超人は時代の象徴であったと同時に、彼自身の目ざしていた姿でもあったのである。

しかし、このような超人は崩壊しなければならぬ運命にあった。超人自身のなかに蔵されていた誤謬の故

はなく、別の力によって倒されなければならなかった。ロンドン自身が、自分のつくった超人と、ニーチェの超人との差異に気がつき、その点で苦しんだとは思われない。ロンドンのいう超人の思想的背景に変革がないのであるから、彼は自分の超人を超人として是認していたとしか考えられない。彼の超人の崩壊は、それより一段高い段階に上昇しようとして、自己を否定するものではなく、その性格そのものの抛棄である。そして、彼の超人に超人としての性格を抛棄せしめた別の力とは何であるかといえば、それは彼の社会主義である。ここで、われわれはジャック・ロンドンの社会主義が如何にして形成されたかを見なければならぬ。それにはまず、彼の生きた時代と彼のおかれた個人的環境ともう一度眼をむける必要がある。

最初に述べたように、この時代はアメリカの国運が隆盛の勢にあるときであった。しかし、その隆盛のかげに、虐げられた人々の呻き声は次第に高くなってきていた。フロンティアはすでに大陸から消失し、農民は、農産物の価格の下落により、以前よりも少い富の分け前で我慢しなければならなくなった。トラストの勃興の裏面

には労働者の困窮があり、大都市の繁栄のすみには貧民窟がひろがりつつあった。

一八九三年には、経済危機が最悪点に達し、賃銀は低落し、銀行は破産し、労働者は各所で失業した。ユージン・デブスが労働運動の主唱者となって活躍したのはこの頃である。一九〇五年には世界独立労働者組合ができ、工業労働者組合の動きも活潑になり、階級間のあらそいは激しくなった。

要するに、この時代は二つの相反するものが同時に存在した時代であった。アルフレッド・ケイジンによれば、「改革の夢に支配されていたこの世代は、帝国主義に魅惑された世代でもあった。アメリカにおいて社会主義がもつとも盛んに成長したこの時代は、同時に野獣的な力が尊敬され、アングロ・サクソンの優越が語られた時代であった」のである。

このような国状の中で、ジャック・ロンドンには、先にも述べたように、貧困家庭に育つたのである。彼は自分のそういう悲惨な環境からぬけ出そうとすると同時に、自分とおなじような社会のどん底にいる人々に対してほとんど本能的な愛情をもっていたのである。十八歳のとき発電所の石炭運搬夫を数ヶ月したことは前にも書いたが、それをやめてから、彼はアメリカとカナダとにわた

って、数千哩の放浪の旅をした。東部の労働者が集中している地域で彼が見たものは、ひからびたじやがいものようになつた人間と、血眼になつて職を探しもとめている人間とであつた。この放浪の旅から帰つて彼は社会党員になつたのであるが、そのときの模様を「いかにして私は社会主義者になつたか」のなかで次のように言つてゐる。

I think it is apparent that my rampant individualism was pretty effectively hammered out of me, and something else so effectively hammered in. But, just as I had been an individualist without knowing it, I was now a Socialist without knowing it, withal, an unscientific one……I ran back to California and opened the books. I do not remember which ones I opened first. It is an unimportant detail anyway. I was already It, whatever It was, and by aid of the books I discovered that It was a Socialist.

(私の奔放な個人主義は実に効果的に私のなかからたたき出されてしまい、何かほかのものが同じくらい効果的にたたきこまれたことは明かだと思ふ。しかし、私は自分でも知らずに個人主義者であつたのと全く同様に、今度は知らないうちに社会主義者になつたのである。そ

れどころか、非科学的な社会主義者となつたのである。私はカリフォルニアに馳けもどつて、そして本を開いた。私は最初にどんな本を開いたか覚えていない。いずれにせよ、そんなことはとりたてていふほどのこともない瑣事である。私はすでにそれだつたのだ——それがなんであつたとしても。そして、本の助けをかりて、私はそれが社会主義者であることを発見した。)

これからもわかるように、彼の社会主義は理論によつて押し進めていって到達した結果ではなく、理論以前のもの、直観的要求を多分にもつたものである。

彼は高等学校に通学しているあいだにも、街頭に立つて社会主義演説をしたりした。そのために少年社会主義者という名で新聞に書きたてられたこともあつたという。そして、成長してからは、アプトン・シンクレアと呼応して社会主義運動の主唱者となり、各地で演説を行つた。

彼の社会主義作品の最初のものは「奈落の人々」The People of the Abyss, 1903である。これは彼が一九〇二年にロンドンのイースト・エンドに六週間滞在したときの経験を書いたものである。ジャック・ロンドン、イギリスの国運が隆盛を極めているとき、その繁栄の中心であるロンドンの中に、悲惨な生活をしている人が数

万が一のことに注意せよ。

From the slimy, spittle-drenched side-walk, they were picking up bits of orange peel, apple skin, and grape stems, and they were eating them. The pits of green gage plums they cracked between their teeth for the kernels inside. They picked up stray crumbs of bread the size of peas, apple cores so black and dirty one would not take them to be apple cores, and these things these two men took into their mouths, and chewed them, and swallowed them; and this, between six and seven o'clock in the evening of August 20, year of our Lord 1902, in the heart of the greatest, wealthiest and most powerful empire the world has ever seen.

(泥だらけの、唾をはぎさらした歩道から彼等はきれぎれになった蜜柑の皮や林檎の皮や葡萄の茎をつまみあげ、それを食っていたのだ。西洋李の種を彼等は齒にはさんでかみくだき、なかの芯を食った。彼らは豆粒ほどのパン屑がちらばっているのをひろい、黒く汚れていて、だれでもまさか林檎の芯とは思わないような、林檎の芯をひろい、それをこの二人の男は口にいれ、かみ、そしてのみこんだ。これが、世界で最も大きく、最も富

んでおり、しかも最も強い帝国の真只中で、キリスト紀元一九〇二年八月二〇日の夕方六時から七時のあいだにおこっていることなのだ。)

ロンドンはこのような惨めな人々の生活を鋭く描きだし、彼らに愛情をそそいでいる。そして、イギリスの帝国主義による経済体制に対して、怒りに近い質問を投げかけているのである。

「奈落の人々」で端緒をひらいた彼の社会主義的な文学活動の極致は、「鉄の踵」The Iron Heel, 1907であろう。彼がそれまでに経てきた生活から直接得た階級意識、勉強によって蓄積された社会主義的知識、そしてみずから各地に社会主義演説をして歩いた彼の活動、それら一切のものがこの「鉄の踵」のなかにたたきこまれていく。

アナトール・フランスは「鉄の踵」の解説に書いている。

『鉄の踵』はジャック・ロンドンが財閥政治に名づけた力強い名前である。この名称をその名とする書物は一九〇七年に発行された。そのなかで彼は、財閥と人民とのあいだに——もし運命の神々が怒りに狂って許すならば——いつか突発するであろう戦いを、我々に描きだして見せる。おお、ジャック・ロンドンこそは、平凡な人

間には隠されているものを見きわめるあの特別な天才をもち、また彼が未来の世界を予知することを可能ならしめた特殊の知識をもっていたのである。彼は現在やっと我々の眼界に展開しつつある一連の事件を予見していたのだ。『鉄の踵』のなかで彼が我々に示している恐しいドラマはまだ実際にはおこっていない。そして、我々はこのアメリカにおけるマルクスの弟子の戦慄的な予言がいつ成就されるか知らないのである。」

物語は、熱烈な革命主義者アーネスト・エヴァーハードが、アメリカの資本主義のあらゆる矛盾を追究し、社会主義革命をおこす話である。彼は革命戦争のなかばで死ぬが、彼のあとに続いたものによって革命は成功するということになっている。この作はエイヴィスという女性の手記という形になっている。彼女はアーネストについて、

All his life he sang the song of man. And he did it out of sheer love of man, and for man he gave his life and was crucified.

(彼は生涯人間の歌をうたった。そして、彼はそれを人間に対する全き愛情からやった。そして、彼は人間のために生命をささげ十字架の刑をうけたのだ。)

といている。アーネスト・エヴァーハードは、人間に

対して全き愛情をもっていたということになっている。

その後、一九一〇年に発表された「強い人々の力」The Strength of the Strong, 1910 では、原始時代の人間を舞台にして、資本主義の矛盾を寓話化して示している。

こういった主な社会主義作品のほかに、彼はまたいくつかの社会主義のエッセイも書いている。その上、彼の手紙は、Dear Comrades: (親愛なる同志諸君へ)ではじまり、Yours for the Revolution, Jack London (革命のために、ジャック・ロンドンより)で終わっている。このような点をあわせ考えれば、彼が熱烈な社会主義者であったと認めざるをえないのである。

さて、ジャック・ロンドンがこのように社会主義者であったことは明かになった。重大な問題は、彼がこれらの社会主義作品と時をおなじくして、先に述べたい、いわゆる超人をテーマにした小説を書いていることである。

超人と社会主義とが両立しないものであることは、ニールチェは明白に述べている。たとえば、「ツアラトストラかく語りき」の中では次のようにいっている。

「幸福な社会主義的な理想は人類を退化せしめる。こ

れはおそらく非常に有用な労役者の種族を生むではあるう。かくして未来の理想的奴隷、不可欠なる下層階級をつくりだすではあらう。」

「万人のために平等の権利——これこそは最悪の不正義である。いかんとなれば、かくするとき最高の人間がそこなわれるが故に。」

また、「人間的、余りに人間的」の中では、

「天才と理想国家は矛盾する——社会主義者はできるだけ多くの人々のために安楽な生活を建設しよう」と熱望している。この安楽な生活を不断に生みだす地盤である完全な国家が本当に実現されたと仮定すれば、偉大なる知性やおよそ巨大な個人が——というのは強力なエネルギーが——成長してくる土地はこの安楽な生活のために荒廃するであらう。そういう国家が実現されたときには人類はすっかりだれ切つていてもはや天才を生むことはできなくなるであらう」といつている。

ニーチエにとっては「最大多数の最大幸福」というようなことや、社会の平均的進歩とかは関心の対称とはならない。彼の関心の題目である超人は創造的個人である。この点において、ニーチエは社会主義とは全く対立する個人主義者である。ジャック・ロンドンの超人が、ニーチエの超人とことなるとはいえ、ニーチエの超人が

社会主義に反対するものであるということを、ロンドンが知らないはずはない。しかも、彼はウルフ・ラーセンについで、

He is certainly an individualist of the most pronounced type.

(彼はもつとも明白な個人主義者である。)と書き、また、

He is a free spirit.

(彼は一個の自由な精神である。)

と言っている。ジャック・ロンドンのいう個人主義者は、適者生存の法則のもとにある社会の適者という意味で、ニーチエのいうような個人主義者とは性格を異にするということは、前にも述べた通りである。しかし、このようなロンドンの超人も当然社会主義と相反するものである。したがって社会主義者であるロンドンも、自分でつくった超人をなんとかして破壊しなければならぬ。彼はこれを「海の狼」、「バーニング・デイルイト」、「エルシノア号の叛乱」でやっているのである。

ロンドンがいかにして彼等を破壊させているかを見てみると、ウルフ・ラーセンは、まずはげしい頭痛におそわれ次第に全身が原因不明の病におかされ、ついに死にいたる。バーニング・デイルイトは自分のやっていたす

べての事業をなげうって田園生活に隠遁してしまふ。パイクは、敵と格闘中、海に落ち姿を消してしまふ。すなわち、一人は内部から崩壊し、一人は超人としての権利をみずから放棄し、また一人は外力によって滅ぼされてしまふのである。しかし、こういう超人の崩壊は、物語の終りに近くなつておこることであり、各作品の大部分にわたつて支配的な地位をしめてゐるものは超人である。「鉄の踵」のなかでは、エヴァーハートをニーチェの超人と呼び、しかも、そのニーチェについては脚註をつけて、「彼は十九世紀の氣ちがひ哲學者である」と書いている。ロンドンはニーチェをこのように説明することによって彼を否定してゐるのであるが、エヴァーハートはいぜんとして超人である。(ただし、エヴァーハートは社会主義者であるから、ウルフ・ラーセンのように、他人を犠牲にしても一向にかまわなまいという超人とは異なる。ごく平凡な意味での超人であり、自己犠牲をすることに陶醉している感をまぬがれない。)

このように見てくると、彼が一八歳で社会主義者になつたときのことについて言つた言葉——「私の奔放な個人主義は実に効果的に私のなかからたたきだされてしまふ、何かほかのものが同じくらい効果的にたたきこまれた」というあの言葉——は、大いに疑わしいものになつ

てくる。「何かほかのもの」、すなわち社会主義がたたきこまれたことにはうなづくことができるが、「自分でも知らずに」もつていた彼の個人主義が「たたきだされた」とは決して考えられないのである。労働階級に対する本能的な愛情にもとづく彼の社会主義と同じように、それと正反対の個人主義、あるいは強者に対する憧れが、彼のなかに根強く生命を保ち続けていたことを認めざるを得ないのである。彼は自分の属していた階級に対して嫌悪をいだいてさえたのである。これは彼の作品に登場する主要人物の社会的地位の選定にもあらわれている。「海の狼」のハンフリー・ヴァン・ワイデンは、アメリカですでに名を成している文芸評論家であり、モード・ブルースターは作家である。「マーティン・イーデン」のルースは裕福な家庭の娘であり、「鉄の踵」のジョン・カニングラムは大学教授兼工場主である。「冒険」Adventure, 1910のジョンは事業主の娘で、ミルズ大に三年在学したことがあることになっている。「スモーク・ペルー」のクリストファー・ペルーはアラスカに行くまえは、軟弱な生活を送つてゐる大学卒業生であり、「星をさまよう人」The Star Rover, 1914のダレル・スタンディングはカリフォルニア大学農学部教授である。「赤死病」The Scarlet Plague, 1915の話者は、や

はりカリフォルニア大学の英文学教授である。このような社会の上流階級に属する人々に対するロンドンの態度には、憧れが見られることはあっても、皮肉な批判的なものは見出すことができないのである。

彼の実生活面を見ても、成功後には、社会主義を信奉するものとしては不可解な態度が多かったようである。たとえば、一九〇七年にはヨットを建造し、ハワイへ向けて出帆し、その後約二年間にわたって、フィジー諸島、マーケサス群島、サモア、ハワイなどに遊覧航海をしている。また、カリフォルニア州に荘大な牧場と邸宅をかまえたりしている。彼は、社会主義作品の中で猛烈に資本主義制度を攻撃しておりながらも、結局その体制の上に安住していたのではないか。

彼の南海旅行の産物としては、「冒険」Adventure, 1910、「南海物語」South Sea Tales, 1911などがある。これらのなかには、超人もあらわれないが、さりとて、社会主義的な人間愛は全然書かれていない。彼が白人の優越を無条件で信じ、また白人が原住民を奴隷として使用することを是認していたことがわかるだけである。社会主義的良心は全く失ったかのようにである。しかも、このような作品のあいだを縫うようにして、彼は社会主義作品を発表しているのである。

ジャック・ロンドンには、自分のからだの中にある、あたかも水と油のように融けあうことのない、これら二つのもののいずれをもふりきることができず、はなはだしく苦しんだ。このことは彼の作品からも知ることができる。「バーニング・デイルイト」に次のような一節がある。デイルイトが実業界で暴威を逞しくしている頃のことである。彼はある日、馬に乗り郊外の野に遊ぶ。どこへゆくにしても百万マイルも離れているのではないかと思われるほどの静寂と、草花の美、水の清冽、苔の素朴な柔かさとに彼は感動する。そして、こういうところに一人の老婆が神を信じ、ささやかに葡萄酒をつくりながら、静かに余生を送っているのを発見する。彼はその葡萄酒を全部買ってやり、自分も年をとったらこんなところでつましく暮そうと思う。また、「海の狼」では、ウルフ・ラーセンは船長室にひとりでいるときに、「おお、神よ、神よ、神よ」と、うめくように叫んでいる。このようなデイルイトの願い、ウルフ・ラーセンの祈りは、ジャック・ロンドン自身の祈りであり、願いだっただけであらう。

ロンドンの南海旅行は、彼に莫大な借財をのこしたといわれている。カリフォルニアの彼の宏壯な邸宅は、ある夜、一夜にして灰燼に帰したということである。こう

した悲惨な事件は、彼を乱作に追いやった。彼は自分の作家という職業を嫌悪するようにさえなった。超人としての性格を捨てたデイライトは、田園生活によりみがえることになっていく。しかし、ロンドン自身はもはやよみがえる余地のないところまで来ていた。彼はこれより前に、すでに自分の死を予見していたとも言える。個人主義者マーティン・イーデンは苦闘のすえ、ついに作家として成功しながらも、成功によって到達した社会を忌み、海中に没して自殺をとげることになっている。これがジャック・ロンドンの行きつく点であったのだ。

ジョン・バリコンは飲酒に耽溺して、ついに自殺をおもうようになる。しかし、彼は最後に叫んでいる。人間が彼を死から救ったと。成功とか、社会に認められることとかは、なんの価値もなくなり、彼にとって残されたものは人間だけである。人間のために戦う——これだけが最後に残った彼のなすべきことであり、これだけが彼を死から救った、と主人公は言っている。ジャック・ロンドンにとっては、今や人間さえも残されていなかった。彼は一九一六年に社会党を脱退したのである。その理由として、社会党が熱血と闘志とに欠け、階級闘争を強調しなくなったからであると彼は書いている。これが脱党の理由として価値あるものであろうか。これが本当

に彼が感じた脱党の理由であらうか。然りと答えることは困難である。

彼に残されたものは、ついに、死以外には何もなかった。彼が超人を破滅させたときには、そのあとに恋愛をもちだして悲劇的結末になるのを避けた。(ウルフ・ラーセンの死んだあとでは、ハンフリー・ヴァン・ワイドンとモード・ブルースターとが結ばれることになる。パイクが行方不明になったあとでは、パット・ハーストが、船長の娘のマーガレットと結婚の約束をする。パーニング・デイライトは超人である性格をすてて、秘書のディード・メーションと結婚する。これらの恋愛には、それを通じて人間の性格をゆりうごかし変形させるような深いものはない。単に、悲劇を回避するための手段として使われたとしか考えられない。ジャック・ロンドンの作品のいくつかが、こういうったハッピー・エンド用の恋愛のために、安価な大衆小説に墮落したことは否定できないことである。)しかし、これらの作品を書いた当のロンドンには、事態を拾取すべき方法は一つも見当らなかった。社会党を脱党してから数ヶ月後、おなじ年の十一月二十二日に、彼はモルヒネを致死量以上に服用して、四十年の波乱にみちた生涯を閉じた。

ここでもう一度アルフレッド・ケイジンの言葉を思い

だして見よう。

「彼はあらゆる主義につかみかかり、一日に十九時間読書と仕事をし、いろいろな方角をたどった。しかし、彼が真底からしがつた道は一つもなかった。」

作品の中では超人を徹底的に追究することができず、社会主義からは脱落し、晩年になってからは自分の職業をさえ嫌うようになっていた彼は、ついに自己分裂にたえられなくなって、死を選ばざるを得なくなったのである。彼がみずから歩んだ人生は、その矛盾の強烈さの故

に、彼のいかなる作品よりも以上に悲劇的であった。右に行こうとすれば左にひかれ、左に進もうとしても、無意識に右から働きかけられ、結局いずれの道にも自己を徹することができず、身動きならなくなったのである。彼の悲劇は、彼の生誕に源を發し、彼の成功とともにテンプを早め、死においてデマーマーンに達した。そのかげに、大きな時代の力が作用していたことを、われわれは見のがすことはできない。